准胝塔

- 密教における塔建築の再考 -

上醍醐寺准胝塔

- 密教における塔建築の再考 -

落雷によって焼失した真言密教寺院、上醍醐寺准胝堂を再建する。再建といっても昔の形のまま再建するわけではない。密教の教えや歴史から、一風変わった現代における五重塔を設計する。

敷地は醍醐寺である。醍醐寺は西側の山の麓にある下醍醐寺と東側の山の上に建つ上醍醐寺の二つがある。
両寺院は２キロほど離れており山を介して徒歩１時間ほどの距離がある。上醍醐寺が聖宝によって建立され、のちに下醍醐寺の堂塔伽藍が確立されて以降、上醍醐寺へ修行へ行く僧侶は激減した。今ではこの両寺院の関係性は非常に希薄である。

ところで、密教では宇宙の真理そのものを表す大日如来と呼ばれる仏が存在する。由緒正しき密教寺院には必ず塔建築が存在する。この塔建築は大日如来の似姿とされ、塔自体が信仰される。真言密教を開祖した空海によると、東側に胎蔵界を表す塔、西側に金剛界を表す塔の二塔あることがふさわしいという。また、それらの塔は自然との関係性を重視するべきだという。

しかし醍醐寺では、山の麓にある下醍醐寺にのみ五重塔が存在する。さらにこの五重塔は胎蔵界と金剛界の両界曼荼羅が西と東に分かれて描かれている。これは空海の教えに反しており、密教の塔においては極めて異例な内部荘厳でもある。

そこで私は、上醍醐寺准胝堂跡地に下醍醐寺五重塔との関係性を深く結びつける新たな五重塔を設計した。
この五重塔は従来の巨木を使った伝統寺院とは異なり、出来る限り小断面の無垢の木を用いる。この木は醍醐山の記憶を宿す木である。密教において山は非常に神聖である。この神聖な部材を一つ一つ丁寧に繊細に山の高さを超えないよう 30m の高さまで組み上げる。
構造的には数々の地震を耐え抜いてきた歴史の深い五重塔と原理は同じである。無数の相持ち部材によって地震エネルギーを急速に減衰させる設計となっている。これまでの五重塔とは異なり、大日如来の似姿とする心柱、相輪、仏像、壁画などは一切排除した。
これは醍醐山に対しての敬意の表れでもあり、塔内部の中心の虚空こそが、姿形の無い大日如来の表しである。

上醍醐寺に建つこの新たな五重塔がこの土地にふさわしい大日如来の姿であり、下醍醐寺五重塔との関係性を深く結びつけ、密教と醍醐寺に新たな威光を与える。
この塔を「准胝塔 (じゅんていとう)」と名付けた。

01. 密教・五重塔・曼荼羅について

一 . 密教とは

密教とは、弘法大使「空海」が開祖した宗教である。
文字によって教えが開かれている他の宗教に対し、
真言密教は瞑想を重んじ曼荼羅や灌頂などの
象徴的な教えを旨としている。

二 . 大日如来と五重塔

密教では寺院の境内に必ず「五重塔」が存在する。
例えば東寺であれば五重塔、高野山であれば多宝塔が有名である。
この塔は、密教において宇宙の真理そのものを指す
「大日如来」の姿似とされている。
密教寺院において塔は非常に重要なものである。

三 . 密教と山

密教では、地、水、火、風、空との関り、
つまり自然との関りを非常に大切にしているため、
山の上に寺院が建てられていることが多い。
五重塔は初層から、地、水、火、風、空を表現している。
密教においては、これだけではなく、初層から大日如来の
足、腹、胸、顔、頭の表現でもある。
このことから大日如来とはとても自然と近いものであることが分
かる。

四 . 准胝観音について

再建する准胝堂の中心には元々准胝観音が安置されていた。
准胝とは清浄を意味し、准胝観音は水の浄化の働きにより
清浄をもたらしてくれる女神として信仰される。
准胝観音は真言密教の中で
特殊な観音、菩薩であり、変化観音と呼ばれ、
それぞれの人や様々な場面において変化して現れる。
そうであれば、焼失した准胝堂が大きな変化をし、
姿形を変えて再建されるべきである。

a. 金剛界曼荼羅

b. 胎蔵界曼荼羅

五 . 両界曼荼羅

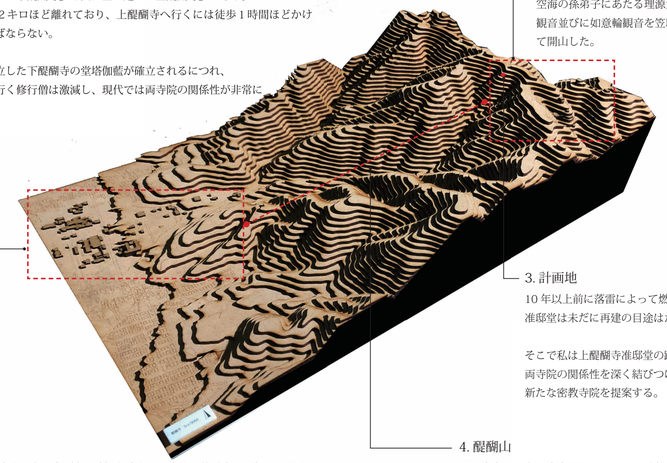
両界曼荼羅は、大日如来の説く真理や悟りの境地を、視覚的に表現した曼荼羅である。密教寺院境内の堂塔にさまざまな形で表現される。
空海によると、密教の寺院には金剛界曼荼羅を象徴する塔を西に、胎蔵界曼荼羅を象徴する塔を東へ安置することがふさわしいとされている。
またこれらの塔は自然との関わりを深く結びつけるべきだという。

02. 醍醐寺について

醍醐寺は、空海の孫弟子「聖宝」が開山した、京都に位置する真言密教寺院である。

西側の山の麓に建つ「下醍醐寺」と山の上に建つ「上醍醐寺」がある。
それぞれの寺院は２キロほど離れており、上醍醐寺へ行くには徒歩１時間ほどかけて山を登らなければならない。

上醍醐寺の後に建立した下醍醐寺の堂塔伽藍が確立されるにつれ、
上醍醐寺へ修行へ行く修行僧は激減し、現代では両寺院の関係性が非常に
希薄になっている。



2. 上醍醐寺
平安時代初期の創建。貞観 16 年(874 年)、
空海の孫弟子にあたる理源大師聖宝が准胝
観音並びに如意輪観音を笠取山頂上に迎え
て開山した。

3. 計画地
10 年以上前に落雷によって燃えた上醍醐寺
准邸堂は未だに再建の目途はたっていない。

そこで私は上醍醐寺准邸堂の跡地に、
両寺院の関係性を深く結びつける
新たな密教寺院を提案する。

1. 下醍醐寺
醍醐寺は山深い醍醐山頂上一帯（上醍醐）を中心に、多くの修験者の霊場として発展した。
後に醍醐天皇が醍醐寺を自らの祈願寺とすると共に手厚い庇護を与え、その圧倒的な財力
によって醍醐山麓の広大な平地に大伽藍「下醍醐」が発展する。

4. 醍醐山
下醍醐寺から上醍醐寺までは２キロほど離れており、徒歩
１時間以上かかる。

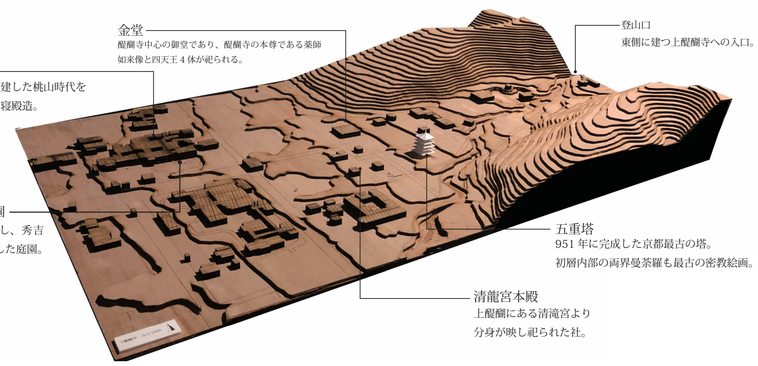
03. 密教寺院の塔について

密教寺院のにおける塔について塔内の安置仏、内部荘厳がどのような特徴を持っているかリサーチを行い表を作成した。

建立年代	仁和二年頃 八八六頃	永仁年間 一二九三～九九	天歴六年 九五二	永延二年 九九八	永保三年 一〇八三	大治元年 一一二六	大治元年 一一二六	大治二年 一一二七	天承二年 一一三二	長承元年 一一三二	保延二年 一一三六	承安元年 一一七一	治承元年 一一七七
名称	東寺五重塔	再建東寺五重塔	醍醐寺五重塔	円融寺五重塔	法勝寺八角九重塔	中尊寺三重塔	円勝寺東三重塔	円勝寺五重塔	法成寺東西五重塔	仁和寺南院三重塔	法金剛院三重塔	多武峰十三塔	蓮華王院五重塔
安置仏	金剛界四仏	金剛界四仏 （大日如来を除外）	胎蔵界五仏 （金剛界四仏力）	毘盧遮那如来 （大日如来）四体 （阿弥陀・釈迦 薬師・弥勒力）	金剛界五仏 （大日如来四体）	摩訶毘盧遮那如来 三尊像各一体 釈迦牟尼如来三尊像 像各一体 毗婆尸如来三尊像 各一体 弥勒慈尊三尊像 各一体	等身大日如来	仏像八体	［東塔］胎蔵界五仏 （大日如来四体） ［西塔］金剛界五仏 （大日如来四体）	等身大日如来像一 体		五尺大日如来一体	両界大日如来各二 作・四方四仏
内部荘厳	［四天柱］ 両界曼荼羅諸尊力		両界曼荼羅諸尊	阿弥陀・釈迦 薬師・弥勒 （毘盧遮那如来四体 力）	八方の柱に月輪仏			［四天柱］ 金剛界三十六尊 ［扉］十二天像	［東塔四天柱］ 四菩提 ［西塔四天柱］ 四波羅蜜		［柱］両部諸尊 ［扉］八相成道		
他の信仰物	塔 心柱	塔 心柱	塔 心柱	塔 相輪	塔 心柱		塔 心柱	塔 心柱	塔 心柱 相輪	塔 心柱 相輪	塔 相輪	塔 心柱 屋根	塔 心柱 相輪
典拠		東宝記	現存遺構 醍醐雑事記	仁和寺諸院家記 扶桑略記	法勝寺御塔供養 願文 中院一品記	中尊寺經蔵文書	永昌記	中右記	平知信記 中右記	仁和寺諸院家記	仁和寺諸院家記	多武峰略記	吉記・覚禅鈔
外観													

これらの表を見てわかるよう、それぞれの塔によって安置物、壁画、相輪、心柱など信仰する対象物に違いがある。つまり、密教全体としてみた時に、何を大日如来としてとらえているかが非常に曖昧である。しかしすべての塔建築に共通して当てはまることは、塔そのものを大日如来として信仰していることである。
現存していないものも多いが、東西に塔を安置している寺院は、東に胎蔵界、西に金剛界を安置しており、空海の理想を守っている。

04. 下醍醐寺について



金堂
醍醐寺中心の御堂であり、醍醐寺の本尊である薬師
如来像と四天王４体が祀られる。

三宝院
秀吉が再建した桃山時代を
代表する寝殿造。

登山口
東側に建つ上醍醐寺への入口。

三宝院庭園
秀吉が設計し、秀吉
の命で着工した庭園。

五重塔
951 年に完成した京都最古の塔。
初層内部の両界曼荼羅も最古の密教絵画。

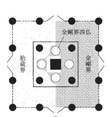
清龍宮本殿
上醍醐にある清滝宮より
分身が映し祀られた社。

a. 下醍醐寺五重塔

下醍醐寺には高さ 38.2m の五重塔がある。
京都に残る遺構として最古のものである。

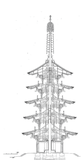
b. 内部壮厳

この五重塔の内部には、東側に金剛界、
西側に胎蔵界を表す両界曼荼羅が描か
れている。
空海によると東側に胎蔵界の塔、西側に
金剛界の塔を安置するのが望ましいと
されているが、醍醐寺はそうではない。
この内部荘厳は密教寺院の塔としては
極めて異例である。



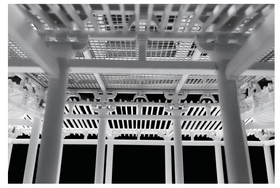
c. 構造

独立した５つの層が
下から積み重ねられ
た構造。各層が庇の
長い大きな屋根を有
しており、塔身の幅
が上層ほど少しずつ
狭くなっていく。



05. 上醍醐寺薬師堂について

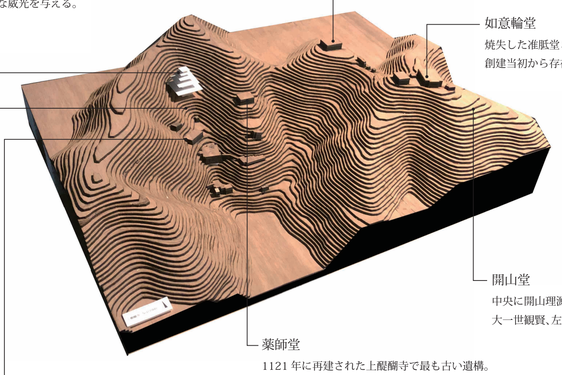
上醍醐寺で最も古い遺構は 1124 年に再建された薬師堂である。
平安時代に設立された当時の姿のまま残っているのは上醍醐寺で唯一の御堂である。
桁行五間、梁間四間の規模で、周囲一間周りを外陣、中央の三間二間を内陣とする。



上醍醐寺の寺院を再建するにあたり、上醍醐寺薬師堂の構造模型 (1:30) を作成した。
山の上の寺院のため巨木を扱うのが困難であったためか、平安時代の寺院としては部材一つ当たりの大きさが小さく、非常に簡素な構造になっている。また、山の自然への敬意の表れか、梁の力強い表現がなく、繊細で質素な構成となっている。

06. 上醍醐寺准胝塔

准胝塔
これらの密教の教えや歴史を踏まえ、准胝堂跡地に一風変わった五重塔を
設計した。
この「准胝堂」が下醍醐寺との関係性を深く結びつける存在になり密教と
醍醐寺の歴史に新たな威光を与える。



五大堂
創建当時は薬師堂に次いで完成され、簡素な造り
であったが現存するものは昭和時代に再建された
もので複雑な意匠である。

如意輪堂
焼失した准胝堂と同じく上醍醐寺の
創建当初から存在する懸造の御堂。

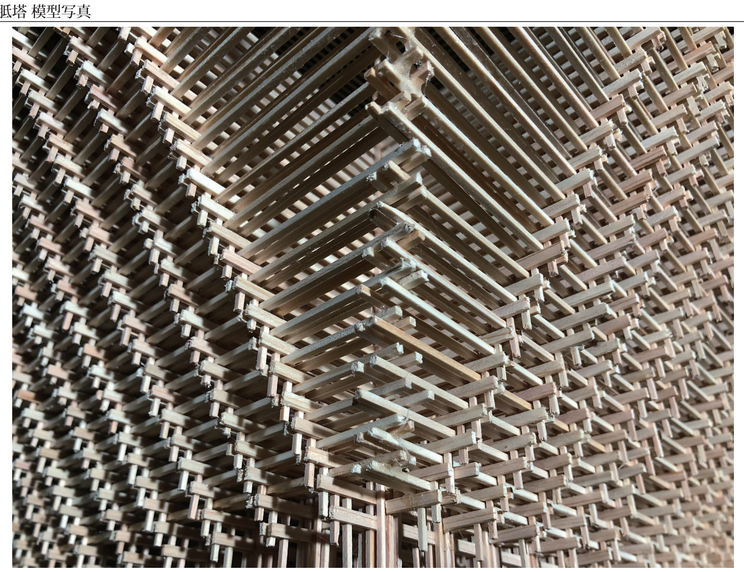
醍醐水
創建した際に、空海の
孫弟子聖宝が飲んだ、
神聖な水。

開山堂
中央に開山理源聖宝、右に
大一世観賢、左に空海を祀る御堂。

薬師堂
1121 年に再建された上醍醐寺で最も古い遺構。
簡素な造りで山に対しての敬意を感じる。

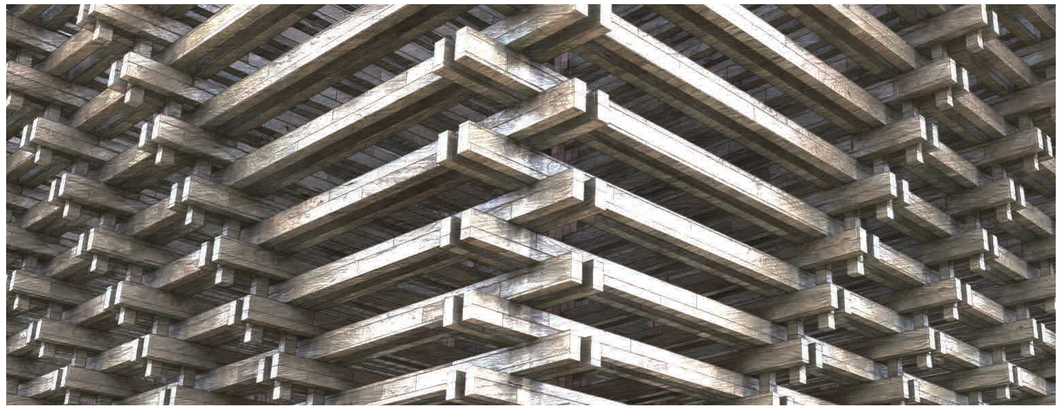
清滝宮拝殿
下醍醐寺の清滝宮本殿と関係の深い懸造の御堂。

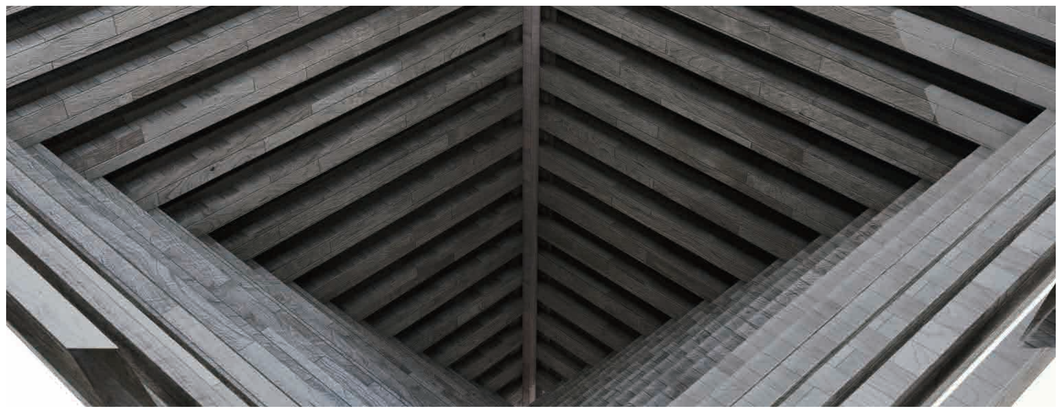
07. 准胝塔 模型写真

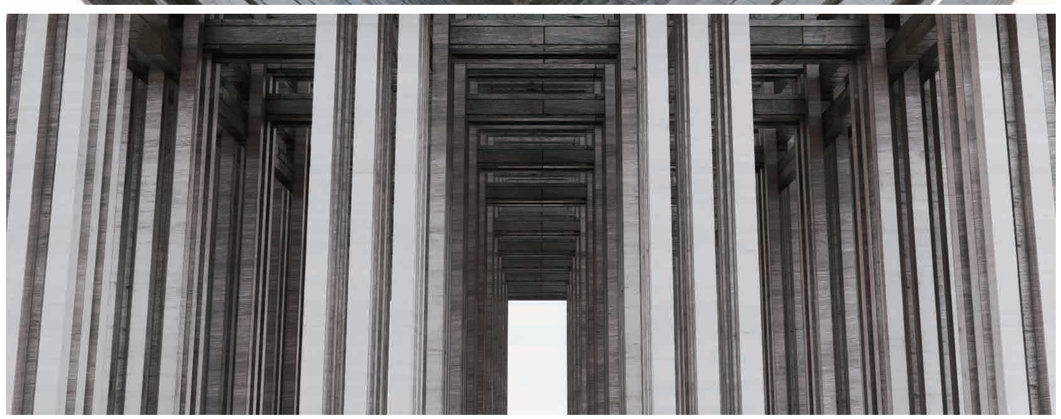


新たな構造様式「大日様」

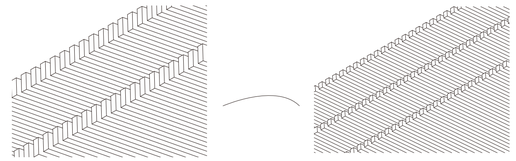
今までの巨木を利用した伝統寺院とは違い、准胝塔はできる限り小断面の木材を用いて設計する。山の上に巨木を運べないのも理由の一つだが、昔から醍醐山に建つ神聖な巨木を切り倒すことは密教の教えに反する。
神聖な塔の中心を守るための構造が必要となるが、鎌倉時代に確立された大仏様の構造様式を参考にした。しかし大仏様は巨木を使っており、複雑で繊細とは言い難い意匠である。そこで繊細な意匠を実現するため、
大仏様の構造を小さな部材で変換し、新たな構造を生み出す。この構造を「大日様」と呼ぶ。心柱もなく、今までの五重塔とは異なる構造体であるが、原理は同様である無数の相持ち部材の摩擦によって地震エネルギーを急速に減衰させるよう設計されている。





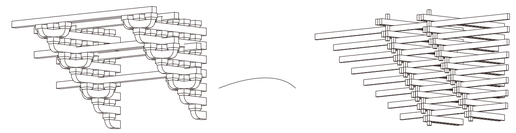


垂木の変換



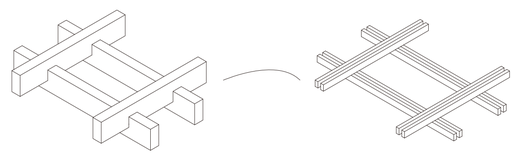
化粧垂木と飛燕垂木　　軒をより深く出す三重垂木

斗供の変換



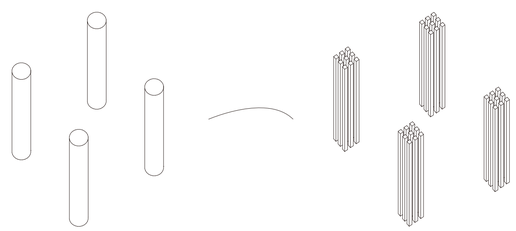
複雑な六手先の斗供　　繊細でシンプルな斗供

梁の変換



大断面の大梁　　二つのハサミ梁

柱の変換

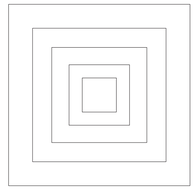


大断面の丸柱　　9つのタバ柱

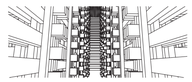
山の上に建つ密教の塔における 20 の要素

密教の教えや歴史から、密教の塔において必要な要素を 20 抽出した。
a 胎蔵界曼荼羅の表現、b 金剛界曼荼羅の表現、c 自然への敬意、d 中心の神聖さ、e 象徴的儀式空間、f 信仰物の除外が必要である。
准胝塔ではこれら 20 の要素を建築に落とし込み、山の上に建つ密教の塔としてふさわしい姿を表現した。

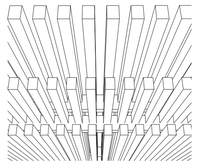
a. 胎蔵界



a-1. 五段平面
胎蔵界曼荼羅の構図の表し

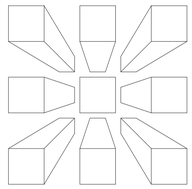


a-2. 内部の部材量
胎蔵界大量の仏、菩薩の表し

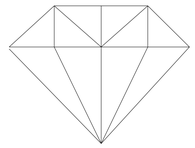


a-3. 三重の垂木
「体」「相」「有」3 つの表し

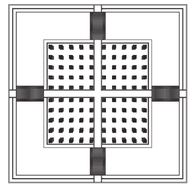
b. 金剛界



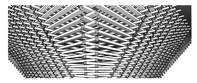
b-1.9 つの柱
金剛界の九会曼荼羅の表し



b-2. ダイヤモンドの形状
金剛を意味する明快な形態

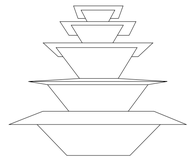


b-3. 上下左右の対称性
大日如来に強い求心的構成を示す



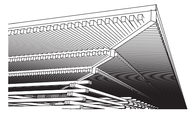
b-4. 外部の部材量
ダイヤモンドのような強固な構造体

c. 自然への敬意



c-1. 五重による自然の表し
地、水、火、風、空を表す五重

c-2. 晒しだす構造
山の自然を受け入れる仕上げ

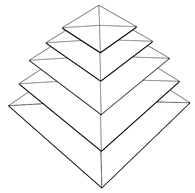


c-3. 雨から守る深い軒
山に降る雨との対話

c-4. 山の木
山の神聖な木を使う

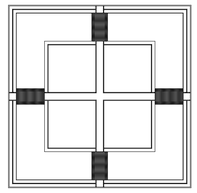
c-5. 山への敬意
山の高さを超えない

d. 中心の神聖さ



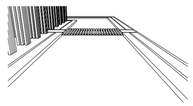
c-6. 蓮の花の形状
曼荼羅に描かれる蓮の花の印象

d-1. 中心の虚空
姿かたちのない大日如来の表し



d-2. 東西南北の道
様々な仏、菩薩、人の通り道

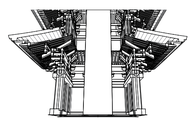
e. 象徴的儀式空間



e-1. 灌頂の水
頭に注ぐ水は山の神聖な水

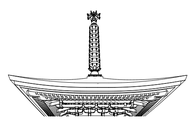
f. 除外する信仰物

e-2. 血縁灌頂のための中心
曼荼羅を配置するための虚空

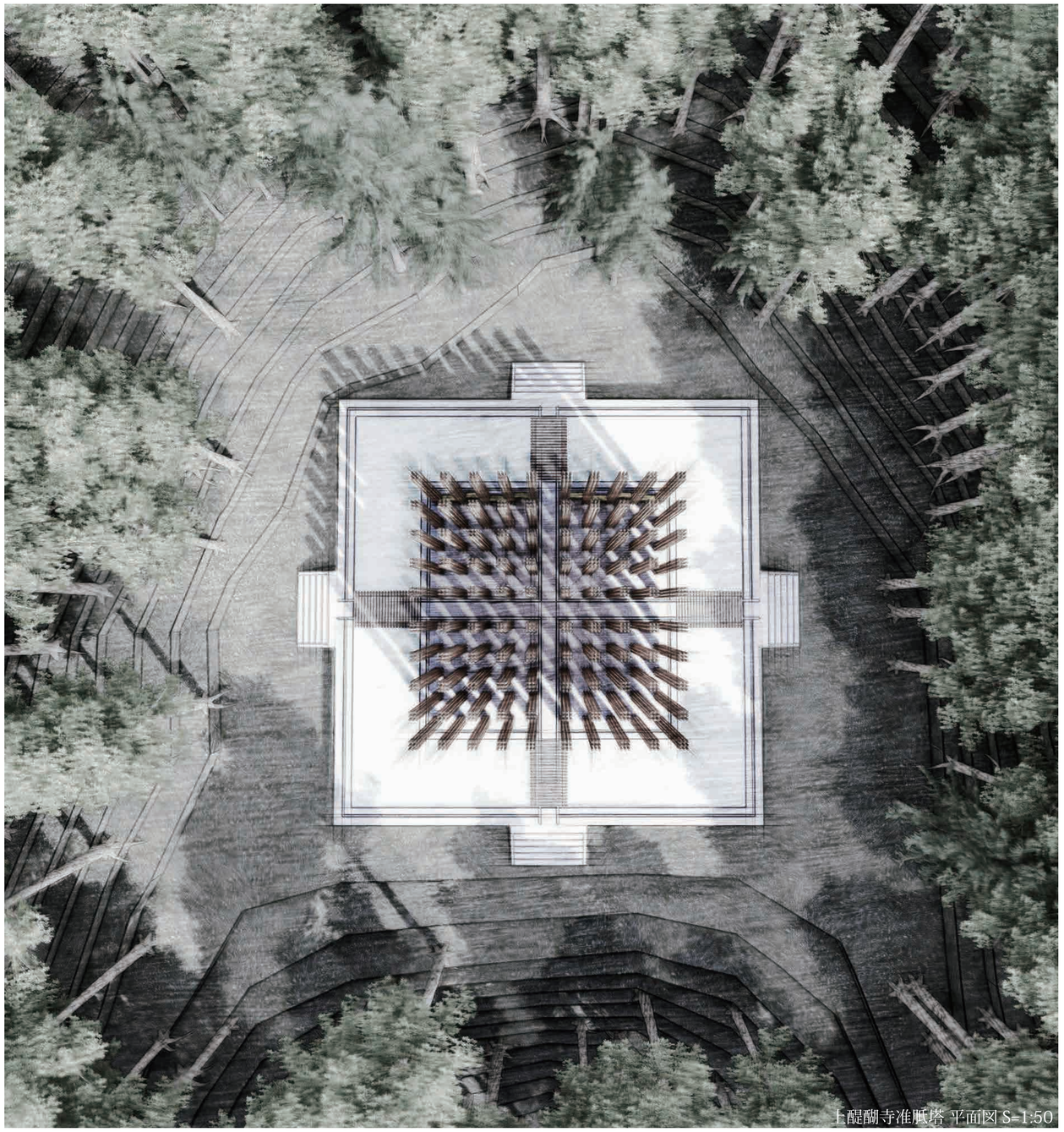


f-1. 心柱の除外
中心の虚空の重要性を意味する

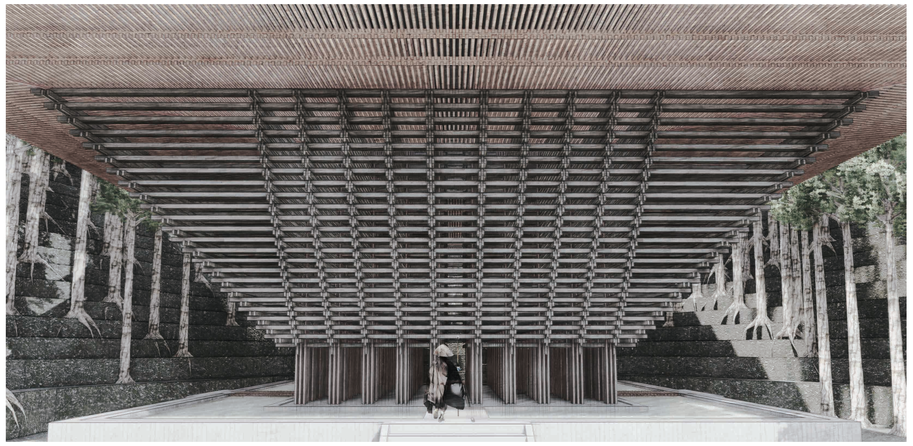
f-2. 仏像の除外
姿形は悟りを開いたときに現れる



f-3. 相輪の除外
神聖な山での必要性はない



上醍醐寺准胝塔 平面図 S=1:50



准胝塔入り口。

准胝とは、
水で汚い心を洗い流すことをいう。

水で心を清らかにするため
醍醐寺の水が浮かぶ道を通る。

塔の中心へ向かう前に
低い入口を頭を下げて通過する。

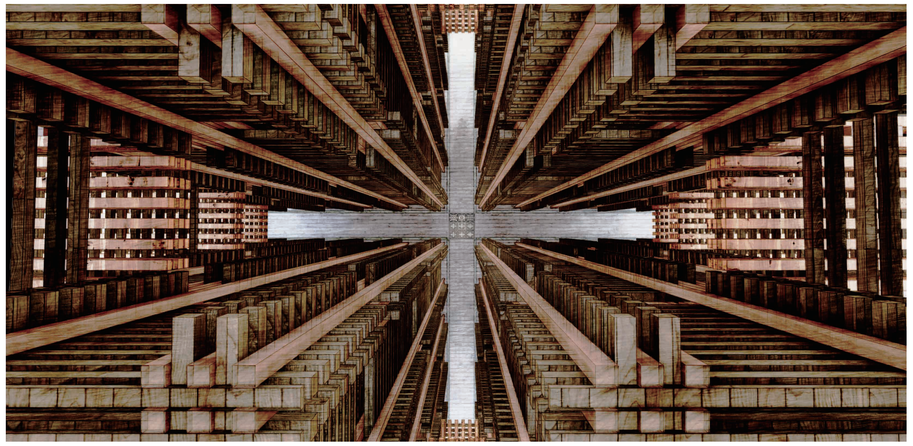
大日如来への敬意の表しである。

准胝塔内部。

胎蔵界と金剛界における
無数の仏や菩薩が出迎えるよう、
塔を構成する多くの部材が迎え入れる。

胎蔵界と金剛界を表すこの塔の中心で、
塔にとりわく水を用いて灌頂を行う。

灌頂とは菩薩が仏になる時、
その頭に諸仏が水を注ぎ、
仏の位に達したことを証明することである。



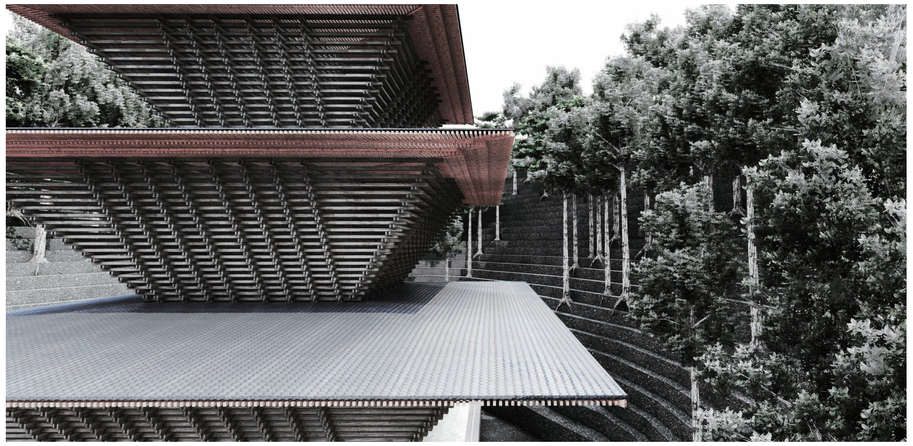
准胝塔を上部から見る。

大日如来を表す中心の虚空、
そして中心への神聖さを増す
東西南北の通り道が見られる。

密教では通常大日如来を姿似とする
心柱や、壁画、仏像を中心に配置する。
しかしその祀られるものは
それぞれの寺院によって曖昧である。

しかし、すべての密教の塔では
塔そのものを大日如来として
信仰していることだけは共通している。

そこで、准胝塔では最も神聖である
中心を虚空とし、目で見ることのできない
大日如来を表現した。



准胝塔外観。

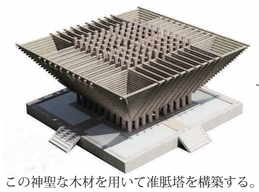
准胝塔は仕上げの外装や窓、扉は一つもなく、
醍醐山のヒノキから成る
神聖な構造体が晒しだされている。

これは大日如来が地、水、火、風、空、山の
自然すべてを受け入れる表現である。

神聖な塔の中心は守らなければならないので、
中心から遠ざかるよう梁は外部へ迫り出し
軒は深く、准胝塔を守っている。

准胝堂の構成

神聖な醍醐山からヒノキを伐採する。
山の上まで巨木を運ぶのは困難であること、また
昔から醍醐山に建つ神聖な巨木を伐採することは
密教の教えに反するためできるだけ小さなヒノキ
を伐採し、材料とする。



この神聖な木材を用いて准胝塔を構築する。
塔の中で最も神聖な空間とされる中心を守るよう
外部へ梁が迫り出す構成となる。

神聖な醍醐山の高さを超えないよう、小さな木を
一つ一つ丁寧に 30m ほどの高さまで組み上げて
いく。繊細な上醍醐寺にあるべき姿の五重塔、つ
まり大日如来そのものの姿となる。